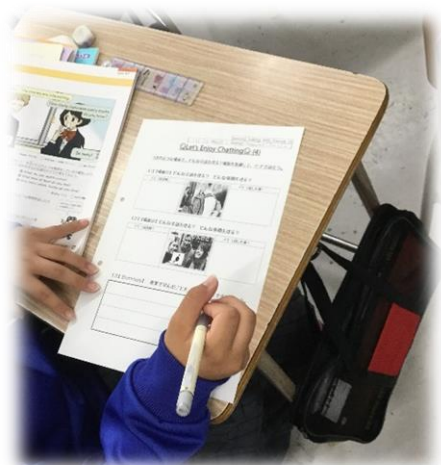


〈中学校 外国語科〉

主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う生徒の育成

—目的や場面、状況等に応じた「話すこと[やり取り]」の指導の工夫を通して—



浦添市立神森中学校 根間 こずえ

目次

I	テーマ設定理由	33
II	目指す子ども像	34
III	研究の目標	34
IV	研究仮説	34
1	基本仮説	34
2	作業仮説	34
V	研究構想図	34
VI	研究内容	35
1	主体的に考えや気持ちを伝え合うこと	35
2	目的や場面、状況用について	35
3	Small Talk の充実	36
4	中間指導の工夫	38
5	パフォーマンスによる評価	38
VII	授業実践	39
1	単元名	39
2	単元の目標	39
3	単元について	39
4	単元の評価規準	40
5	単元の指導と評価の計画	40
6	単元末におけるパフォーマンステストとそのルーブリック	40
7	本時の学習	41
VIII	結果の考察	43
1	作業仮説(1)の検証	43
2	作業仮説(2)の検証	46
IX	成果と課題	48
1	成果	48
2	課題	48
	主な参考・引用文献	48

主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う生徒の育成
—目的や場面、状況等に応じた「話すこと[やり取り]」の指導の工夫を通して—

浦添市立神森中学校 根間 こそえ

【要約】

本研究は、「話すこと[やり取り]」の領域において、対話の目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちを主体的に伝え合うことを楽しむことができるよう指導の工夫を行う。Small Talk や中間指導の充実などを通して、生徒が主体的に考えや気持ちをやり取りできるようになることを目指す。

キーワード □「話すこと[やり取り]」 □目的や場面、状況等 □Small Talk □中間指導

I 主題設定の理由

私たちの生きる社会は急速な技術革新や情報化、グローバル化に伴い、価値観の多様化や社会構造の変化に直面している。このことで、互いの情報を共有するのに必要な英語は、国際言語としてますます重要性を増している。

「中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語編」(以降、解説外国語編)の総説における改訂の趣旨に、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされる」と述べられている。したがって、これからの変化の激しい社会を生きる人々にとって、多様な価値観や文化的背景を持つ人々と、主体的に関わり、協働するために、外国語によるコミュニケーション能力がますます必要となっていく。

中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(H28)において、外国語科における「対話的な学び」の実現に向けて「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場면을計画的に設けること」と示されている。子どもたちが将来様々な場面で多様な人々と関わっていく力を育てるために、英語の授業においては実際にやり取りを行う言語活動を一層重視し、英語を用いてコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて考えやその理由などを伝え合うこと、そのような活動を通して自

分の知識や情報の深まり、自己の考えを深める経験を積むことが求められている。

これまでの授業実践を振り返ると、決められたパターンで繰り返し言ったり話したりすることに積極的に取り組める生徒は多い。一方で、英語を話す活動やパフォーマンステストを行った際、複数の生徒が「単語を覚えることが足りなかった」「覚えてきたことを言えなかった」などと振り返っていた。このように、与えられた場面等に応じて自らの考えやその理由を表現したり、伝え合ったりすることに苦手意識を感じ、目的や場面、状況等に応じたコミュニケーションに到達しきれない生徒がいる。その要因として、言語使用の正しさなど知識・技能の指導や評価に偏っていたことが考えられる。そのため、目的や場面、状況等に応じて、これまでの学習や経験、新たな学習事項などを活かし主体的に考えや気持ちを伝え合うことができるようにするための指導の工夫が必要であると考え

そこで、本研究では、目的や場面、状況等を設定した「話すこと[やり取り]」の活動を通して、主体的に他者と自分の考えを伝え合おうとする生徒の育成を目指す。そのための指導の工夫として、表現の定着や対話の継続に慣れるための Small Talk や、生徒自身の気づきを促すための言語活動間の指導などの手立てを行う。このような活動や手立てを通して、生徒が英語を使う目的や場面、状況等に応じてやり取りを行うことを楽しむことができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 目指す子ども像

学んだことや経験を活かしながら主体的に考え、他者との英語でのやり取りを楽しむ生徒

III 研究の目標

目的や場面、状況等に応じて、主体的に考え、情報を整理し、英語で考えや気持ちを伝え合おうとする生徒を育成する。

IV 研究仮説

1 基本仮説

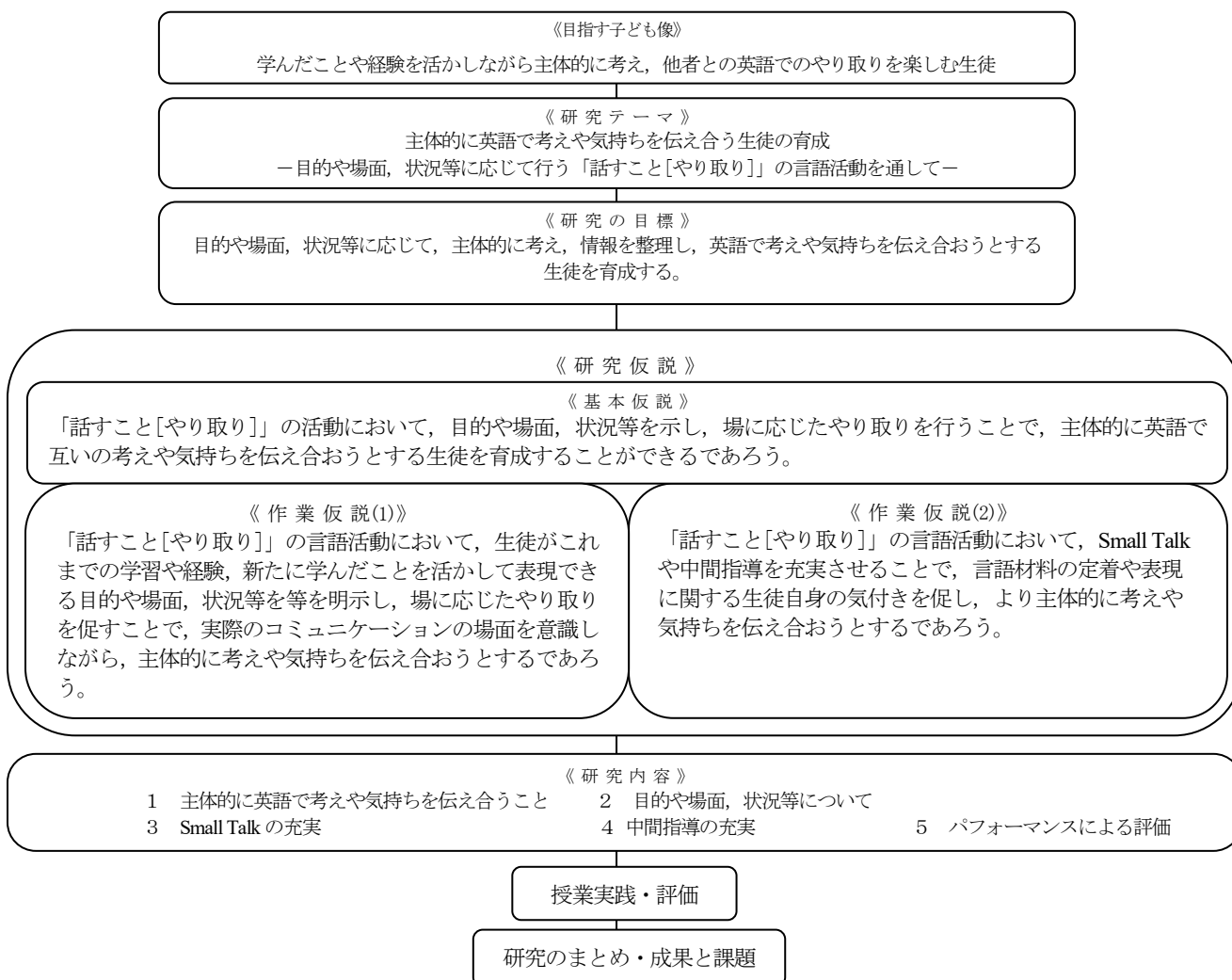
「話すこと[やり取り]」の活動において、目的や場面、状況等を示し、場に応じたやり取りを行うことで、主体的に英語で互いの考えや気持ちを伝え合おうとする生徒を育成することができるであろう。

2 作業仮説

(1) 「話すこと [やり取り]」の言語活動において、生徒がこれまでの学習や経験、新たに学んだことを活かして表現できる目的や場面、状況等を明示し、場に応じたやり取りを促すことで、実際のコミュニケーションの場面を意識しながら、主体的に考えや気持ちを伝え合おうとするであろう。

(2) 「話すこと [やり取り]」の言語活動において、Small Talk や中間指導を充実させることで、言語材料の定着や表現に関する生徒自身の気づきを促し、より主体的に考えや気持ちを伝え合おうとするであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 主体的に英語で考えや気持ちを伝え合うこと

(1) 主体的にコミュニケーションを図ること

グローバル化の進展により、国内外への人やモノ、情報の行き来がますます盛んになっている。文部科学省(H26)は、「現在学校で学ぶ児童生徒が卒業して社会で活躍する2050年頃には、国民一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される」と提言している。吉田(2020)は、グローバル化などの社会の変化に伴い、日本の英語教育は「Fish Bowl Model(金魚鉢モデル)」から「Open Seas Model(大海モデル)」へと転換していく必要があることを掲げている。表1は、吉田(2020)を参考に筆者がまとめたものである。

表1 Fish Bowl Model と Open Sea Model

Fish Bowl Model(金魚鉢モデル) ＝従来の英語教育	Open Seas Model(大海モデル) ＝いま求められる英語教育
<ul style="list-style-type: none"> ・誰かに世話をしてもらい →教師が必要なものを与える ・不純物は取り除かれる →誤りは許されない →ネイティブの英語でなければ誤りとされる ・魚は人工的な環境なら生きていけるが、一歩外に出たら生きていくのは難しい →テストや入試のためだけに学んだ英語が、それ以外で役に立たないかも知れない <p>これまでの英語教育では、英語の知識は身につくが、運用力はつかない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他者に依存せず、自らの力で生きていかなければならない→自主性 ・絶えず変わる水質に自ら適用していく必要がある→変化への適応 ・間違いは許容される ・他の魚と共存していく →多様性 <p>これからの社会では、生徒が自らの力で、現実の世界の中で英語を使って生きていくことができるような英語教育が求められている。</p>

生徒たちは、「金魚鉢」の中のように限定的で常に世話をしてもらえ環境ではなく、価値観や文化的背景が異なる多様な人々が混在する「大海」のような広い社会において、自ら進んで他者と向き合い、関わり、協働していく必要がある。そのために、英語を用いて主体的に他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することは重要であると言える。

本研究では、変化の激しい社会の中で、

未知の場面や初めての相手とでも自ら進んで関わり、互いを受け入れ、協働していこうとする生徒を育成するための「話すこと[やり取り]」の活動の工夫を行う。

(2) 英語で考えや気持ちを伝え合うこと

言語は、考えや気持ち、情報などを伝える手段であり、解説外国語編においても「互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視することが求められる」ことや「特に他者とのコミュニケーションに焦点を当てて指導することが重要である」ことが述べられている。このことから、英語で言われたことを理解したり、自分のことを表現したりという単方向のコミュニケーションにとどまらず、英語で伝え合う」という双方向のコミュニケーションを重視する必要があると言える。

本研究では、主体的に英語を使って自分の考えや気持ちを互いに伝え合う活動を実践するにあたって、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等の工夫、Small Talkの工夫、またそれらをより充実させるための中間指導の工夫を行う。

2 目的や場面、状況等について

新学習指導要領の外国語教育において、「目的や場面、状況等」は重要なキーワードの一つである。解説外国語編によると「目的や場面、状況等」とは「コミュニケーションを行うことによって達成しようとする目的、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の環境」である。

解説外国語編における外国語教育の目標には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせて(中略)コミュニケーションを図る資質・能力を育成する。」と示されている。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状

況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」である。(解説外国語編, H29)。山田(2022)は、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方について、図1のように示している。

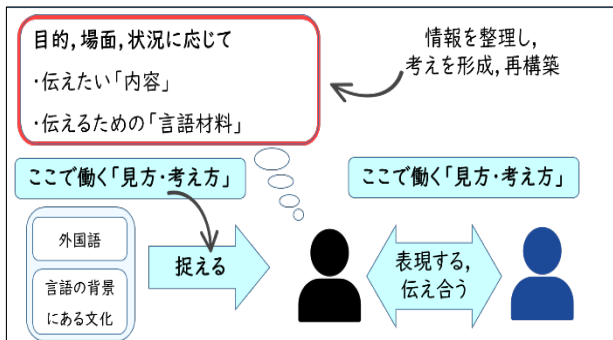


図1 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方(イメージ図) (出典 山田, 2022)

このことから、英語を用いて主体的に他者とコミュニケーションを図る上では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を生徒が理解した上で考えを整理し、考えや気持ちを伝え合うことが必要であると言える。

(1) 「主体的に英語で考えや気持ちを伝え合う」こととの関連

酒井(2021)は、目的や場面、状況等を設定して行うコミュニケーションの意義について「目的意識を持つことによって、主体的に学習に取り組むことができる」ことを述べている。つまり、「誰に、何を、何のために伝えるか」という意識を持ってコミュニケーションに向かうことで、生徒自身が見通しをもったり方向性を決めたりして言語活動に取り組むことに繋がると言える。

また、山田(2022)は、言語を使って何を伝え合わせたいのかという「内容」を重視することの重要性について「言語材料を習得させてから活動させるのではなく、当該言語材料の自然な使用場面を提示した上で言語活動を展開すること、すなわち『内容が先、英語は後』という指導観を持つ事が大切である」ことを述べている。これらのことから、主体的に英語で相手と考えや気持ちを伝え合おうとする態度を育てるために、生徒たちが自然と英語を用いて表現し

たくなるような、あるいはその必然性を感じるような「目的や場面、状況等」の設定が肝要であると考えられる。

(2) 目的や場面、状況等に応じた言語活動

山田(2022)は、解説外国語編をもとに、言語活動とは「知識及び技能を活用し、思考力・判断力・表現力等を育成するために取りまわせるもの」と述べている。とりわけ、「話すこと[やり取り]」の言語活動は、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等などに応じて、考えなどを形成し、それを表現する活動」であるとしている。授業者は、言語を何のために使うのか、どのような場面で、どのような相手に対して使うのかを吟味した上で、目的や場面、状況等を設定し、言語活動を展開する必要があると言える。そこで、授業実践では生徒達にとって身近な目的や場面、状況等を提示し、表現したい内容を考え、整理した上でやり取りに臨めるよう工夫する。

3 Small Talk の充実

(1) Small Talk とは

文部科学省の「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」(H29, 以降 外国語ガイドブック)によると、外国語の授業における Small Talk とは「帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること」である。外国語ガイドブックによると、Small Talk の目的は「(1)既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、(2)対話の続け方を指導すること」の2点である。Small Talk の取り組みを積み重ね、表現の定着を図ることで、言語使用の目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながらやり取りを楽しむことに繋がるだろうと考える。

以下の表2は、文部科学省の「中学校外国語：移行期間における指導資料(中学校外国語科)」(2017, 以降 移行期間指導資料)を参考に Small Talk 指導に関する五つのポイントをまとめたものである。

表2 Small Talk 指導のポイント

1. 内容重視	・身近な話題の中で、自分自身の考えや気持ちなどを伝え合わせる。 ・教師も自分自身のことを英語で伝える。やり取りを楽しむ。
2. 対話の継続	対話を継続することができるような表現を段階的に使わせていく。
3. 既習表現の活用	伝えたいことを伝えることができるよう、既習表現を想起させる指導を行う。
4. 指導過程	「活動→指導→活動」の過程で指導する。
5. 指導観	指導の成果が出てくるのには時間がかかることを理解し、継続して指導を行う。フォーマットを暗記させるなど、その場限りのパフォーマンスを求める指導はしない。

本研究では、授業冒頭の10分程度の時間を使って、単元を通してのSmall Talkの充実を図る。表3は、移行期間指導資料と瀧沢(2022)の例を参考に、筆者が作成したものである。本研究ではこの例をもとに、Small Talkの実践を行う。

表3 Small Talk の実践例

活動	発話例(T:教師 S:生徒)	指導上の留意点
①Teacher Talk	T: How was your weekend? Well, I went to ●● and ate △△. I had a great time there. Did you have a good weekend?(全体へ呼びかけ) S: Yes! T: Sounds nice! What did you do? S: え〜と… I play baseball. T: Oh, you played baseball. How about you? (以下、数名の生徒とやり取りを行う)	・話題の提供、語彙への意識付け ・既習事項との関連をもたせる ・教師と生徒との双方向性のあるやり取りとなるよう留意する
②Small Talk(1回目)	S1: Did you enjoy your weekend? S2: Yes. S1: What did you do? S2: Baseball. S1: Uh...At school?	・教師は、机間指導を行い、生徒の取組状況を確認する。 ・生徒の発話内容を中間指導に繋げる。
③中間指導	T: Do you have any questions? (質問を呼びかける)	・生徒の気付きを促す視点での指導 ・既習表現の想起 ・対話の継続のためのポイントの確認
④Small Talk(2回目)	S1: Did you enjoy your weekend? S3: Yes. S1: That's nice. What did you do? S3: I played baseball. S1: Oh You played baseball. At school? S3: Yes. How about you?	・同じ話題でもう一度やり取りを行う (ペアを隣同士から前後に変えるなど、相手を変える)

(2) Teacher Talk について

村野井(2014)は、「英語教師が教室内で学習者に理解可能なインプットを与える手段として、最も重要なのは教師が教室で英語を使うこと」と述べる。それを踏まえ、Teacher Talk とは「教師が学習者に向かって話す目標言語であり、様々な点で言語習

得を促進するものである」としている。Small Talkの前にTeacher Talkを行う目的について、瀧沢(2022)は「(1)Small Talkの話題を投げかけること、(2)生徒がどの程度その話題について対応できるかを確認すること」と述べている。これらのことから、Teacher Talkは生徒の言語使用を自然に引き出すための手段であり、その後の言語活動へのきっかけを与えるものであると考える。その際、授業者の一方的な発話や、話題の提案・誘導にならないよう留意する必要がある。そのために、授業者が生徒にとって身近なこと(学校生活、行事、流行など)についての話題を提示し、それについて数名の生徒に質問を投げかけたり、応答に対して反応するなど、双方向性のあるTeacher Talkとなるようにする。また、表3の例では、前単元までの既習事項である過去形の使用を想定し、週末にしたことを主な話題として用いている。このように、生徒が既習事項を活かしてやり取りに臨めるよう、生徒にとって身近で、考えや気持ちの表出がしやすい話題の工夫も重要である。

(3) Small Talk の指導過程について

移行期間指導資料においては、Small Talkの指導過程は「活動→指導→活動」の過程で行うこととしている。1回の活動で終わらず、指導を挟んで2回行うことで、より確実な定着を図り、自分の考えや気持ちを自分の言葉で言えるようになることが期待できる。さらに瀧沢(2022)は、Small Talk中に言えなかった語句や表現をメモさせるための振り返りシートを用いることを提案している。これまでの私の実践でも、Small Talkのためのワークシートを用いてきたが、本研究でもこのようなシートを作成し、生徒が既習事項の確認や、新しく知った表現を蓄積しておくことができるように工夫を行う。

また、移行期間指導資料においては、1つの話題について2コマの授業を使って指導を行うことを示している。同じ話題について繰り返し取り組むことで、表現や会話の継続の仕方の定着を図り、英語を用いたやり取りを主体的に行おうとする生徒の育成に繋げたい。

中間指導については、Small Talk 以外の場面でも必要となるため、後述する。

4 中間指導の充実

国立教育政策研究所が作成した「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する資料」(2020, 以降 指導と評価の一体化資料)において、言語活動間の指導について、図2のように示している。

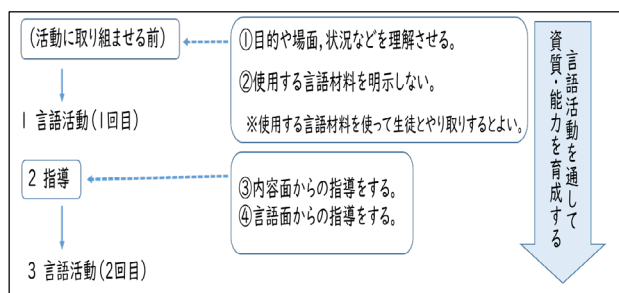


図2 言語活動間の指導について(イメージ)

(出典 国立教育政策研究所, H29)

蓬沢(2022)は、「『伝えたい事があるけれど、うまく伝えられない』『ああ、そうやって英語を使えば伝えられるんだ』ということに生徒自身が気づき、できなかったことをできるようにする」ことが、中間指導を行う意味であり、目的であると述べている。このような言語活動における中間指導は、Small Talk の時はもちろんのこと、授業のあらゆる言語活動の場面で適宜行われるべきものである。表4は、中間指導で留意すべき内容を、指導と評価の一体化資料をもとに筆者がまとめたものである。

表4 中間指導の視点

内容面の指導	言語面の指導
<ul style="list-style-type: none"> 目的や場面、状況に応じた発話内容になっているかという視点で行う 何を伝えたとよりよくなるか等を含め、生徒の発話を取り上げ全員で考える 	生徒の発言を受け止めながら、以下のことを行う。 <ul style="list-style-type: none"> 単語での発話を文にする 語順の誤りを訂正する 日本語での発話を英語にする
いずれの指導も、以下の点に留意する。 <ul style="list-style-type: none"> 意図的な机間指導が必須 「生徒の発話の何を聞き取るのか」という視点を明確に持つ 生徒の言葉で授業を創る視点を持つ→「どう思う?」「なぜそう思う?」などの発問を工夫する 	

本研究では、帯活動の Small Talk や、授業の展開部分で行うやり取りの活動において、こうした

中間指導を積極的に行う。それによって、生徒は自分の表現を振り返ったり、他者の表現したことを自分に照らし合わせたり、他の工夫ができないかを生徒や教師と一緒に考えたりすることができるようになるだろうと考える。このように、中間指導を含めた言語活動の積み重ねにより、言語材料を定着させ、それらを目的や場面、状況に応じて主体的に用いてやり取りを行おうとすることに繋げる。

5 パフォーマンスによる評価

パフォーマンステストは、単元の指導を通じて生徒が身に付けた力を評価するために、単元末に実施する。内容は、単元の授業で学習する内容に基づき、生徒が自身の考えや経験、これまでの学びを活用してやり取りできる話題を示し、やり取りを行うものとする。

パフォーマンステストのルーブリック(評価基準)は、以下のように作成し、事前に生徒に伝え、配布する。目的や場面、状況等に応じて主体的に考えや気持ちをやり取りしているかという視点で、3つの条件に基づき評価する(表5)。テスト実施後には生徒のルーブリックに評価を記入して渡す。生徒が自身の単元を通しての取り組みやテストの内容を振り返り、今後の学習や身に付けた力について見通しを持ち、主体的に学ぶ態度の育成に繋げる。

表5 パフォーマンステストの評価基準

条件1：相手意識を持ち、対話の目的に合った質問をしている。 条件2：自分の考えや好みをよく知ってもらうために、他の人に工夫して伝えている。 条件3：相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続している。		
	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	3つの条件を満たしてやり取りしている。	3つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
b	2つの条件を満たしてやり取りしている。	2つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
c	bを満たしていない。	bを満たしていない。

Ⅶ 授業実践

1 単元名 Lesson6 Lunch in Chinatown 『ONE WORLD English Course 1』

2 単元の目標

- (1) Which,Why,Who,Whose などを用いた疑問文やその答えの文の意味や構造を理解している。
日常的な話題について、Which,Why,Who,Whose などを用いて質問したり、相手からの質問に答えたりする技能を身に付けている。 【知識及び技能】
- (2) 相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話することができる。 【思考力、判断力、表現力等】
- (3) 相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話しようとしている。 【学びに向かう力、人間性等】

3 単元について

(1) 教材観

本単元は、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説の「(3) 話すこと[やり取り]」に関する内容を取り扱い、「イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする」ことを目的とする。本単元で出てくる疑問詞は、Which,Why,Who,Whose などを取り扱う。それぞれ、使用場面を想定しながらのやり取りを積み重ねることで、定着に繋げる。授業では、生徒達が自分の好きな物やおすすめの物などについて、簡単な文を使いながら自分の考えを伝えたり、相手の考えを知るためにやり取りをする活動を行う。自分の考えを整理しながら伝えたり、相手の考えを聞いて反応したりすることで、相手をより深く知ろうとしたり、自分のことを伝えたりすることに繋がるだろう。

(2) 生徒観

本学級で検証前に実施したアンケート調査において「英語が好きか」という質問に「好き」あるいは「どちらかというが好き」と答えた生徒の割合は、全体の74%とやや高かった。また「やり取りの際に、今まで学習した表現などを思い出して使うようにしているか」という質問に対して、97%の生徒が「いつもしている」あるいは「どちらかというとしている」と肯定的に答えた。このことから多くの生徒が英語を学ぶことに意欲的で、やり取りの際にはこれまで学習して身に付けた表現を進んで使おうとしていることがわかる。一方で「英語の授業で難しいと感じるのはどんな時か」という質問には「自分の伝えたい事をどう表現するかわからないとき」「会話が続きず黙ってしまうとき」「単語やフレーズの意味がわからないとき」と答えた生徒が特に多かった。このように、自分の伝えたいことを英語で言い換えることや、会話を続けることに課題があることがわかった。そこで、生徒が既習表現を活かしながら、自分の考えを自分の言葉で伝えられるようになるよう指導を継続していく。

(3) 指導観

本単元では、単元末に「話すこと[やり取り]」の活動として、自分のおすすめを相手に伝えたり、相手の好みやおすすめを聞いたりするパフォーマンス評価を行う。授業では、帯活動での基本的な表現や語彙の定着を図る。また、使用した英語表現を全体で共有し確認する場を設ける。生徒が言いたいことを言い換えて聞かせたり、どのように言い換えることができるか生徒自身に考えさせたりすることで、既習表現や知識を活かしてやり取りを行うことができるようにする。また、やり取りの活動においては、今日学習している言語活動や、これまでに学習したことを使って対話できる目的や場面、状況を設定したやり取りの活動を取り入れることで、自らの考えや思いを伝え合うことを楽しむことができるようにしていく。

4 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
「やり取り」 話すこと	<p>【知識】 Which, Why, Who, Whose などを用いた疑問文やその答え方の意味や構造を理解している。</p> <p>【技能】 身の周りのことや日常的な話題について、疑問詞を用いて質問したり、相手の質問に答えたりする技能を身に付けている。</p>	相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、自分の考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話することができる。	相手のことをもっとよく知り、自分のこともよく知ってもらうために、考えや好みなどを工夫して相手に伝え、その内容について会話しようとしている。

5 単元の指導と評価の計画(11 時間)

時	◆目標(ねらい) ■主な活動等	評価規準(評価方法)
1	<p>◆単元で学習することを確認し、自己目標を立てる。</p> <p>◆いくつかのものから、どれを選ぶかを、理由とともに伝え合う。</p> <p>■本単元で学習すること、目指すことを確かめ、自己目標を立てる。</p> <p>■お勧めのレストランについて理由とともに伝え合う。(Which / Why を用いた疑問文)</p>	<p>記録に残す評価は行わない。ただし、ねらいに即して生徒の活動状況を見届け、指導に活かすことは毎時行う。活動させるだけにしないよう、十分留意する。</p>
2	<p>◆いくつかの候補から1つ決めるために、工夫して会話する。</p> <p>■教科書の人物が、どのような目的や場面で会話しているかを理解する。</p> <p>■旅行先で食事する場所を決めるために、グループで考えやその理由を伝え合う。</p>	
3	<p>◆単元で学んだ文法事項を自分で使えるように、使う目的や場面とともに振り返る。</p> <p>■ワークやノートブックを用いて、疑問文の使い方や使う目的、場面などを復習する。(Which / Why)</p>	
4	<p>◆友達の欲しいものや、することを尋ねたり答えたりする。</p> <p>■グループメンバーの欲しいものや好みについて、尋ね合う。(Who を用いた疑問文)</p> <p>■レストランで、食べたいデザートを決めるためにやり取りする。</p>	
5	<p>◆友達の欲しいものや、することを尋ねたり答えたりする。</p> <p>■教科書の人物が、どのような目的や場面で会話をしているかを理解する。</p> <p>■いくつかの料理の中から欲しいものを伝え合い、注文する。</p>	
6	<p>◆持ち主がわからないものについて、尋ねたり答えたりする。</p> <p>■いくつかの物(鞆、筆記用具など)の持ち主を見つけ、渡すために会話する。(Whose を用いた疑問文、代名詞を用いた応答)</p>	
7	<p>◆よくすることについて、くわしく伝え合う。(How often do you~?)</p> <p>■ワークやノートブックを用いて、疑問文の使い方や使う目的、場面などを復習する。(Whose / 代名詞)</p>	
8	<p>◆単元で学んだ文法事項を自分で使えるように、使う目的や場面とともに振り返る。</p> <p>■ワークやノートブックを用いて、疑問文の使い方や使う目的、場面などを復習する。(Whose / 代名詞)</p>	
9 本時	<p>◆休みの日に遊びに行く場所を決めるために、互いの考えや好みについてやり取りする。</p> <p>■グループで遊びに出かける場所を決めるため、互いの考えや好みを聞き合ったり、自分の考えや好みを工夫して伝えたりする。</p>	<p>【思判表/態度】(観察)</p> <p>互いの考えや好みなどを、工夫して伝え合っている/伝え合おうとしている。</p>
10	<p>◆パフォーマンステスト</p> <p>■グループ(3人)で、休みの日に遊びに出かける場所やしたいことを決めるため、互いの好みや考えをやり取りする。</p>	<p>【思判表/態度】(パフォーマンス評価)</p> <p>①相手意識を持ち、対話の目的に合った質問をしている/しようとしている。</p> <p>②自分の考えや好みをよく知ってもらうために、他の人に工夫して伝えている/伝えようとしている。</p> <p>③相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続している/しようとしている。</p>
11	単元テスト (筆記, リスニング)	

6 単元末におけるパフォーマンステストとそのルーブリック

(1) パフォーマンステスト「グループで遊びに行く場所を決めよう」

グループで、休日に遊びに行くことになりました。みんなでどこに行くか、何をするかを決めるために、互いの考えや好みを質問しあうなど、工夫して会話しましょう。

(2) ルーブリック (評価基準)

「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」について、単元を通して指導したことを踏まえ、次のルーブリックに沿って評価する。

条件1：相手意識を持ち、対話の目的に合った質問をしている。		
条件2：自分の考えや好みをよく知ってもらうために、他の人に工夫して伝えている。		
条件3：相手の考えを求めたり、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続している。		
	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	3つの条件を満たしてやり取りしている。	3つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
b	2つの条件を満たしてやり取りしている。	2つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
c	bを満たしていない。	bを満たしていない。





7 本時の学習 【9 / 11 時間】

(1) 目標 休みの日に一緒に行く場所を決めるために、互いの好みやおすすめを工夫して伝え合う。

(2) 授業仮説

これまでに学習したことや、生徒自身の経験等を活かして表現できる目的や場面、状況等を明示し、やり取りを促すことで、使用する場面を意識しながら、主体的に自分の考えや気持ちを伝えたり、相手の好みや考えを知ろうとするであろう。

(3) 展開

過程	学習活動	○指導上の留意点 ★予想される児童生徒の反応	評価規準 (評価方法)	
導入 10分	1 あいさつ	○教師や近くの席の人と英語で挨拶し、コミュニケーションを取りやすい雰囲気を作る。	 図3 これまでの学習を振り返る様子	
	2 導入 前時までの学習について	○これまでの学習を振り返り、どんなことができるようになったかを考える。 ★おすすめの食べ物を聞いたり、その理由を聞いたりできる。 ★複数の人に対して、好きな物や欲しいものを尋ねたりできる。		
	3 Small Talk 話題：winter vacation (冬休み)	○これまで学習したことを活用しながら、ペアで工夫して会話を続ける。(1分間×2回) ○机間指導を、次の視点で行う。 ①疑問詞やその他の既習表現を活用しているか。 ②相手の考えをより良く知ろうとしているか。		 図4 Small Talkの様子
	4 動画	○教師2人が対話する動画を見る。(週末に一緒に出かけるために、互いの好みを聞き合っている) ★聞きとったことなどをワークシートにメモする。 ○2回目は、2人の会話の中に本単元で学習した疑問詞を含む英文が使われているかに着目して見る。 ★一緒に行く場所やすることを決めるために、お互いの好みやおすすめを伝え合っていたことに気付く。		 図5 動画視聴の様子
展開 30分	5 めあて	【本時のめあて】一緒に行く場所を決めるために、互いの好みやおすすめを工夫して伝え合おう。	 図6 地図を活用しながら、自分の考えを整理する様子	
	6 考えを整理する	○自分が行きたい場所や、友達に勧めたい場所について、ワークシートを使って考えを整理する。(必要に応じて地図を活用する)		

	<p>7 やり取り① (教師と生徒)</p>	<p>○疑問詞など既習表現を意識して使えるよう、発問や生徒とのやり取りの中に意識的に取り入れる。 T: Let's talk with your friends. You decide (決める) where to go in your holiday. What food do you like, oosan? S: Uh... Sushi? T: So, Which sushi restaurant do you recommend? S: ΔΔ restaurant? T: Nice idea. Why do you recommend ΔΔ? . . .</p>	 <p>図7 ペアでのやり取り</p>  <p>図8 グループでのやり取り</p> <p>【思判表/態度】互いの考えや好みなどを、工夫して伝え合っている/伝え合おうとしている。(観察)</p>
	<p>8 やり取り② (生徒同士, ペア)</p>	<p>○何人かの生徒とやり取りした後、ペアで対話させる。(2分ずつ, 1回目は隣同士, 2回目は前後のペアで) ○机間指導を, 次の視点で行う。 ①疑問詞やその他の既習表現を活用しているか。 ②相手の考えをより良く知ろうと工夫しているか。 ○机間指導での生徒の発話を中間指導に活かす。</p>	
	<p>9 やり取り③ (グループ内)</p>	<p>○3~4人のグループになって, グループで出かける場所を決めるためにやり取りする。(約3分) T: Let's make a group of 3 or 4. Let's decide where to go in your holiday in your group.</p>	
<p>終末 10分</p>	<p>10 まとめ</p>	<p>○やり取りをしながら気付いたことや, 工夫できたことなどを, ペア同士で伝え合う。 ○互いの好みに合ったおすすめを伝え合うために工夫したことや, 学んだことなどを, 生徒の言葉を反映させ, 使用した英文を使ってまとめる。</p>	
	<p>【まとめ】 Which ○○ do you ~? を使って, 相手にしたいことなどを尋ね, 「なぜそこに行きたいか」は Why を使って尋ねた。相手の好きな物などを聞くことで, 好みが分かかって選びやすくなる。</p>		
	<p>11 振り返り</p>	<p>○本時で学んだことについて, 今日使った表現を含めて自分の言葉でまとめる。</p>	

(4) 板書

Today's Schedule
Wednesday
December 21st
cloudy

Small Talk
topic: winter vacation
友だちとショッピングモールに行く
I go to (shopping mall) with my friend.
まだ決めてない
I have not decided

Which (restaurant) do you recommend?
Who wants to go to OO?
Whose OO is this?
How often do you ~?

おすすめのレストラン } 次の日曜
・映画 } 7時からのため

まとめ
Which ○○ do you ~? を
使って 相手にしたいことなどをたずね
た。「なぜそこに行きたいか」は
Why を使ったからだ。
・相手の好きなものなどを聞くと、
好みが分かる。えんぴつや本がある。

Ⅷ 結果の考察

1 作業仮説(1)の検証

「話すこと[やり取り]」の言語活動において、生徒がこれまでの学習や経験、新たに学んだことを活かして表現できる目的や場面、状況等を等を明示し、場に応じたやり取りを促すことで、実際のコミュニケーションの場を意識しながら、主体的に考えや気持ちを伝え合おうとするであろう。

(1) 既習事項や新たな学びを活かすこと

① 手立て

授業の中のやり取りの活動において、これまでの学習や生徒自身の経験、またその時間に学習する事項などを使って伝え合う場面を設けた。例えば、一緒に食事するためにおすすめの店やその理由をやり取りする場面では、新出の文法事項である疑問詞の *which* を含む疑問文の他に「Do you ~?」や「What ○○ do you ~?」などの既出の表現を工夫して使用するよう促した。

また、その授業で新たに扱う基本文を使ってやり取りを行う際、「その文を使って質問するときって、どんなとき?(どんなことを聞きたいとき?)」と発問するなど、実際のコミュニケーションの場を意識してやり取りに臨めるように工夫した。授業の振り返りでは、授業内のやり取りについて、自身や他者の発言を振り返り、どのような表現を使うとより良いやり取りができるか、学習したことは今後どのような場面で使えるかなどを考えることができるような発問の工夫を行った。

② 結果

検証後に行ったアンケートにて「単元の前後で自分が成長したと感ずること」について質問したところ、複数の

生徒が既習事項や知識を活用しながらやり取りしよう意識して取り組んだことが分かった。

表6のア～エの生徒は、対話をする中で分からないことがあった際に、既習事項を活かして対応することができたと回答した。オの生徒の記述からは、既習事項を活用して会話の継続ができるようになったことで、楽しいと感じることが増えたと実感していることがわかった。

表6 自分が成長したと感ずること①

ア	習ったことを思い出してどうにか伝えたこと
イ	今までの習ったことを思い出しながら、会話をしたりしたこと。
ウ	習っていないことも、今まで習ったことである程度伝えられるようになった。
エ	Lesson 6の単元でのスモールトークのときに言い方がわからない英語があっても、今まで習った似てる単語で対応することができるようになった。
オ	習った表現などを使って、前よりも会話が続くようになって、前よりも楽しいと感じることが増えた。

さらに、授業でのやり取りや、振り返りシートからも、生徒がこれまでの学習や経験、新たな学びなどを活かそうとしている様子が見られた。

例えば、第7時の授業では「How often do you ~?」を使って普段よくすることを伝え合うやり取りを行ったが、生徒同士のやり取りの後に、ある生徒から「どのように会話を始めたらいいのかわからない」という質問が出た。それをクラス全体で共有したところ「最初に『暇な時は(放課後には)何をやるの?』と質問することで、スムーズに会話ができ、相手のことも分かるかも知れない」との意見が出た。生徒たちは、これまでに学習した表現を用いて質問できそうだと気づき、1学期に学習した「What do you do (in your free time / after school)?」などを思い出しながらやり取りをする様子が見られた。図9は、生徒Aの第1時と第7時の振り返りシートである。第1時の振り返りでは、授業を通して理解したことを記述するに留まっていたが、第7時には、前述のやり取りの中で新出の表現と既習事項を合わせて活用しながらやり取

りすることで、相手をよりよく知ることができると気付いたことが伺えた。

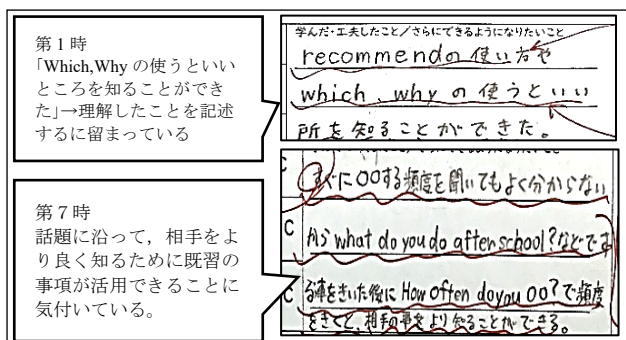


図9 生徒Aの振り返りシートの変容

③ 考察

新たに学んだことに加えて、既習事項を活用することを意識しながらやり取りすることを積み重ねることで、コミュニケーションの目的や場面、状況等を意識し、主体的にやり取りを行うことに繋がったと考える。

一方で、アンケートにて「英語を使ってやり取りするとき、既習表現を思い出して使うようにしているか」と質問したところ、「いつでもしている」「時々はしている」と肯定的に答えた生徒は、検証前も検証後も全体の93%と変わらなかったが、その中の「いつでもしている」と答えた生徒の割合が、41%から27%に減少した(図10)。既習事項や知っていることを活用してやり取りすることを続けたことで、それまで「できている」と感じていた事が「実はまだ足りていないのではないか」と感じるようになったなど、生徒の意識が変化したのではないかと考える。

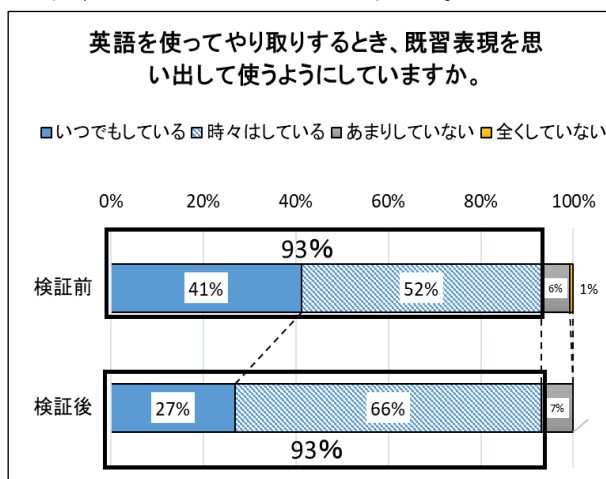


図10 既習表現の活用について

(2) 目的や場面、状況等を明示したやり取り

① 手立て

授業のやり取りの活動では、生徒が主体性を持ってやり取りに臨むことができるような目的や場面、状況等設定した。「週末にすることを決めるために、やり取りしよう」「レストランで、グループの皆の欲しい物を注文をするためにやり取りしよう」など、具体的なやり取りの目的や場面、状況等を意識し、そのためにどのような表現が使えるかを考えながらやり取りに臨むよう促した。場面設定の際も、教師からの一方的な提示にならないよう、本時の授業の内容を踏まえながら生徒自身が考えることができるよう発問を工夫した。

② 結果

検証前と検証後のアンケートで「やり取りの際に特に意識したこと」について質問したところ、「どんな場面でどんな相手に話すのかを考えること」と回答した生徒は、18%から37%へ増加した。また「話題や場面に合った表現を使うこと」と答えた生徒は、48%から59%に増加した(図11)。

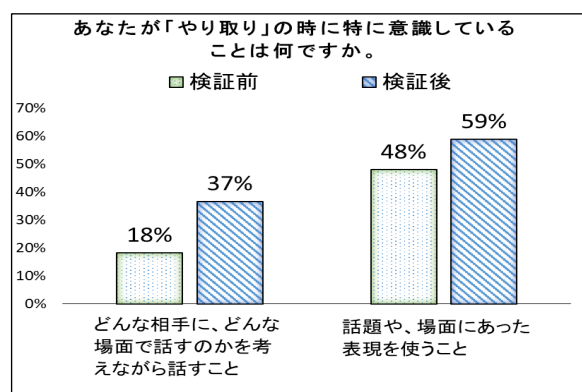


図11 「やり取り」の際に意識したこと

また、生徒の振り返りシートに、コミュニケーションの場面を意識しながら対話に臨んだことが伺える記述が見られた。生徒Bは、単元の第1時の振り返りでは言語を使用する目的や場面、状況等についての具体的な記述が見られなかったが、第9時には、「友達と休日に出かける場所やするこ

とを決める」というやり取りの目的や場面、状況等を意識し、単元で学習したことを用いた記述が見られた(図12)。

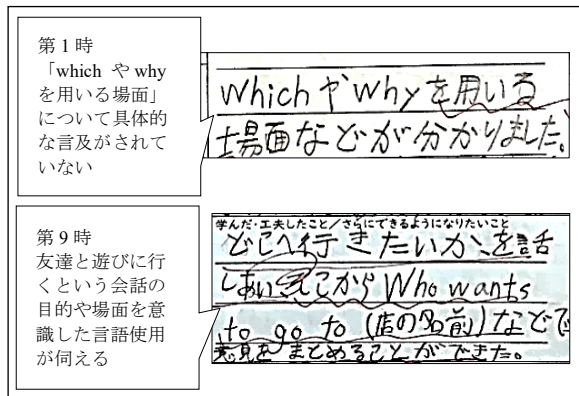


図12 生徒Bの振り返りシートの変容

図13の生徒Cの振り返りシートも同様に、第1時は言語使用の具体的な目的や場面、状況等に関する記述は見られなかったが、第6時には、振り返りの際に言語の使用場面を日常に照らし合わせて考え、使ってみようとする記述が見られた。

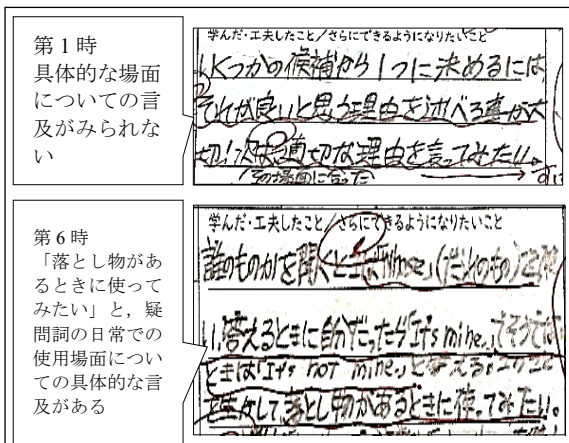


図13 生徒Cの振り返りシートの変容

単元末のパフォーマンステストでは、図14の3つの条件に沿って観察し、評価を行った。グラフは、各条件に達した生徒の割合である。この評価から、「一緒に遊びに行く場所やすることを決めるためにやり取りする」という目的や場面・状況等を踏まえ、相手に考えや好みを質問したり(条件1)、自分の考えを述べたりする(条件2)ことができた生徒は、全体の約6割であった。互いの考えを良く聞き、質問に应答したり、相づちを打ったり、相手の発言を繰り返したりしながら対話を継続する(条件3)ことができた生徒は、全体の96%であった。

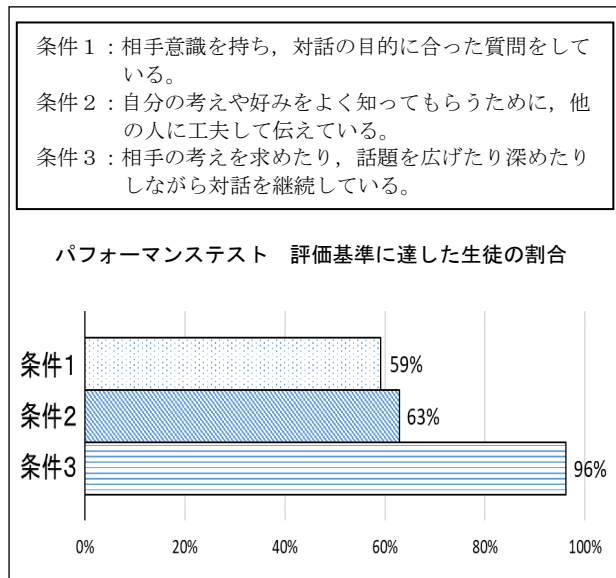


図14 パフォーマンステストの結果

図15は、パフォーマンステストでの生徒D・EとAETの発話内容である。(ア)の場面では、生徒DがAETに対して最初に週末の予定を尋ねてから、遊びに行こうと誘う様子が見られた。また(イ)の場面では、生徒Eが自分の行きたい場所を先に伝えた上で、単元で学習した Who を含む疑問文を使って他の2人にその場所に行きたいかどうかを問いかけて、それに対し生徒Dが「I do.」と应答するなど、目的を意識したやり取りを行う様子が見られた。

※生徒D・生徒E (以下 D,E) AET (以下 T)

D: Are you free next weekend?

T: Yes, I am. Are you?

E: Yes.

T: Oh, let's do something.

D: I want to play with you.
Where.... you go?

E: I want to go to ●●.
Who wants to go to ●●?

D: I do.

T: Me too. Let's go.

D: I want to go to game area.

E: Me too.
(以下省略)

(ア)一緒に出かけるために、週末の都合を尋ねている

(イ)自分の行きたい所を伝えた上で、他の人の考えを聞くために疑問詞を使用し質問を投げかけている

図15 生徒D, Eの発話内容

③ 考察

図11のアンケート結果や図12, 13の振り返りシートの記述から、やり取りの際にどんな場面でどんな相手に話すかを考えたり、話題や場

面に合った表現を使うことへの意識が高まったことが伺える。パフォーマンステストにおいても「友達とどこへ行くか、何をするかを決める」という目的を意識し、相手に質問したり、自分の気持ちを伝えたり、相手を誘ったりする表現が見られた。図 15 のやり取りでは、単元で学習した事項を活用して会話を展開する様子も見られた。このことから、単に学習したことを覚えて使うだけでなく、目的や場面、状況等を意識し、これまでの学びや経験などを活用しながら、その場に応じた表現を考えて主体的にやり取りしようとしていることが伺える。

このように、実際のコミュニケーションを意識し、主体的に考えや思いを伝え合うために、目的や場面、状況等に応じたやり取りを積み重ねることは有効であると考えられる。

また、図 14 から、全体の 9 割以上の生徒が、相手の発言に応じた応答や相づちなどをしながら対話を継続することができていることがわかる。

一方で、話題に合った質問を投げかけたり、自分の考えを伝えたりすることにはまだ課題がある生徒がいる。やり取りの様子を観察すると、黙ったまま相手の発言を待つ生徒や、会話をどのように始めたらよいか戸惑う生徒などが複数名いた。生徒が自信を持って自己表現や質問ができるよう、授業で新出事項のインプットを丁寧に行うとともに、既出の表現を思い出して活用することができるやり取りを、工夫して行う必要がある。また、相手意識を持ち、相手をよりよく知ろうとする気持ちや、自分をよりよく知ってもらいたい気持ちを大切にしながら豊かなやり取りができるよう、指導を工夫することも重要であると考えられる。

2 作業仮説(2)の検証

「話すこと[やり取り]」の言語活動において、Small Talk や中間指導を充実させることで、言語材料の定着や表現に関する生徒自身の気付きを促し、より主体的に考えや思いを伝え合おうとするであろう。

(1) Small Talk や中間指導の充実

① 手立て

単元を通して、Small Talk を帯活動として実施した。既習の表現や新出の表現を使ってやり取りができるトピックを示し、やり取りを促すことで、自らの身近なことや関心のあることについてやり取りを楽しみながら、既習事項の定着を図った

Small Talk 前の Teacher Talk では、教師自身が考えや好みなどを伝えたり、関連した質問を生徒に投げかけ、やり取りすることでトピックや使用する言語材料について気付きを促し、生徒が自分で既習事項を活用してやり取りに臨めるよう工夫した。

さらに、やり取りを通しての新たな気付きや、使うことができた表現などは、配布した Small Talk Sheet (図 16) に記入しておくことで、言語の定着を図り、次のやり取りでの活用に繋がられるようにした。

Small Talk Sheet					
【目標】相手の考えをよりよく知るために、工夫して話そう。					
Date (日付)	①Topic (話題)	②Note (言いたかったことや、先生に質問したこと、新たに言えたことなど…自由にメモしよう!)	③プラス 1文	④相づち	⑤質問
6/1	例 rice or bread	・ Which do you like, ● or △? ・ ●●といたいときはどうすればいいか?	○	○	△
/	1	その日の話題 (Topic)	メモ欄(自分が言えたこと、言えなかったこと、学んだことなどを書く)	プラス 1文、相づち、質問などができたかを記録する	
/	2				
/	3				

図 16 Small Talk Sheet

授業内で生徒がやり取りを行っている間は表 4 の「中間指導の視点」をもとに机間指導を行い、会話のトピックや場面に合った発話ができているかを聞き取り、中間指導の際には生徒の発話で工夫されていることを共有して、使えそうな場面で使ってみよう促したり、間違えやすい表現などは一緒に考えながらより良い表現に直すなどの指導を行った。

また、中間指導の際「○○とは英語で何と言うのか」という質問が多く挙がっていたが、すぐに教えることはせず、学習したことや使ったことのある表現を使って表したり、

他の言葉で言い換えることができるかを自分で考えたり、思い出すよう促すなど、指導の在り方を工夫した。

② 結果

検証後のアンケートにて「Small Talk Sheet にメモしたことを次の会話の時に見直したり、使ったりしたか」と質問したところ、「ほとんど毎回見直し、メモしたことを使った」あるいは「時々は見直したり、使ったりするようにした」と回答した生徒は、全体の84%であった(図17)。

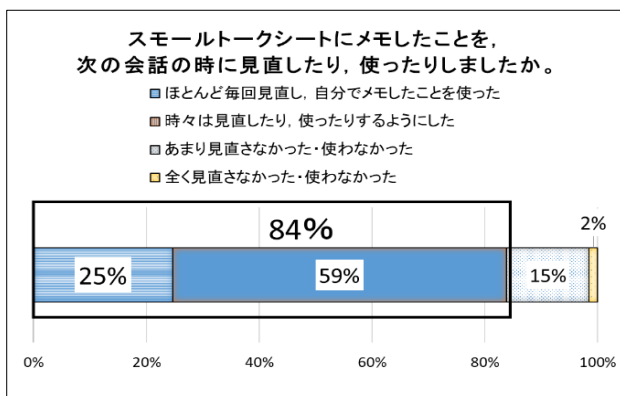


図17 Small Talk Sheet の活用について

また、単元末のアンケートで、Small Talk Sheet の活用方法について質問したところ、最も多かったのは、「学んだことや新しく知ったことをメモした」、次いで多かったのが「できたこと、言えたことをメモした」という意見であった(表7)。

表7 Small Talk Sheet の活用方法

スモールトークシートを、どのように活用しましたか。	
学んだことや新しく知ったことをメモした	75%
できたこと、言えたことをメモした	56%
友達の発言から学んだことをメモした	47%
先生に聞いたことをメモした	45%
自分で調べたことをメモした	44%
相手に聞きたいこと、話したいことなどを事前にメモした	42%
後から質問したいことをメモした	27%
あまり活用できなかった	7%
その他	6%

Small Talk や中間指導を通して、生徒は既習表現を使いながら自分の伝えたい事を伝えようとする様子が徐々に見られるようになった。図18は、生徒FのSmall Talk Sheet の

記述の変容である。生徒Fは、第1回のSmall Talk(話題：レストラン)において、相手におすすめのレストランを尋ねるために使用した表現をメモしている。これを活用し、第6回のSmall Talk でおすすめの場所を質問する表現の際に、第1回で使用したものと同じ英文を、使用する単語を変えて活用したことが記録されていた。



図18 生徒FのSmall Talk Sheet の記述

また、1回目のやり取りを踏まえて中間指導で表現への気付きを促すことをしたうえで2回目のやり取りに臨むことで、生徒が新しく学習する表現や既習事項を使って言いたいことを表現できることに気付き、自ら既習事項を思い出そうとしたり、自分で書いたメモなどを見返しながらやり取りを行ったりと、学習したことを活用してやり取りする意識を持つ生徒の姿が見られた。Small Talk 以外のやり取りの活動の際にも、Small Talk Sheet を見直し、自身でメモした表現を使いながらやり取りに臨む生徒が見られるようになった(図19)。



図19 Small Talk Sheet を活用しながら対話する様子

また、対話に必要な表現を生徒自身で考えたり思い出したりすることを促す指導を積み重ねることで、生徒の意識や行動に変容が見られた。表8は、検証後のアンケートの「自

分が成長したと思うこと」についての質問に対する回答の一部である。

表8 自分が成長したと感ずること②

ア	自分でなんていうかを考えたり、言ったりすることが前よりできるようになった。
イ	わからない英語は必ず調べています。
ウ	わからなかったら調べてその単語を使おうとした。
エ	分からない単語などがあったときなどは、自分からメモしたり、調べたりできるようになった。
オ	今までの授業で何を習ったかを見返すことを意識するようになった。

③ 考察

多くの生徒が Small Talk や中間指導を通して得た気付きや、使用した言語材料を活用し、自分の考えや思いを伝え合おうとしていた。また、多くの生徒が自らの気付きや成果などをメモするために Small Talk Sheet を活用しており、そこでメモしたことを他のやり取りの場面でも活用している姿が見られた。

中間指導を通して表現の定着や気付きを促す中で、表8のアの生徒のように、自分の表現したいことをどのように表現するかを自分で考えるようになったり、イ～オの生徒のように分からない表現があれば自分で調べたり、メモを参照したりするようになったことが伺えた。これらのことから、Small Talk や中間指導を充実させることで、言語使用や表現への気付きを促し、自分で身に付けた表

現を活用しながら、より主体的に考えや思いを伝え合うことに繋がったと考える。

Ⅹ 成果と課題

1 成果

(1) 既習表現や新たな学びを活用しながら、目的や場面、状況等に応じたやり取りの活動を積み重ねることで、その場に応じた表現を工夫し、主体的に互いの考えをやり取りすることができた。

(2) Small Talk や中間指導を充実させ、基本的な表現の定着を図ったことで、生徒が既習事項を思い出して活用しながらやり取りするようになった。

2 課題

(1) 生徒が「学び・育ちの実感」を持つような効果的な「フィードバック」「振り返り」「個人内評価」などの評価の工夫が必要である。

(2) より相手意識を持った豊かなやり取りができるよう、コミュニケーションの目的を明らかにした課題設定と、よりスムーズな自己表現ややり取りに繋がる帯活動の更なる工夫を行う。

【主な参考・引用文献】

- ・ 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』
- ・ 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2020年)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 外国語】』
- ・ 中央教育審議会(2016)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』
<https://www.bunkei.co.jp/kaitei/images/chukyoshin2017.pdf>
- ・ 文部科学省(2017)『移行期間における指導資料について(中学校外国語科)』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/05/1414476_1.pdf
- ・ 山田誠志 著(2022)『全国の実践から学ぶ中学校英語教育35のポイント』 日本標準
- ・ 村野井仁 著(2006)『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店
- ・ 瀧沢広人 著(2022)『中学校英語 指導スキル大全』 明治図書
- ・ 酒井英樹 著(2021)『特集 目的や場面、状況をどのように設定するか』 三省堂
- 三省堂小学校英語マガジン ACE 4
https://tb.sanseido-publ.co.jp/wp-sanseido/wp-content/uploads/2023/01/ACE-No7_HP.pdf
- ・ 吉田研作(2020)『これからどのような英語教育が求められるのか～言葉で「つながる」授業をつくる～』
上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム報告書
- ・ 蓬沢守 著(2022)『中間指導って何?—今からできる中間指導の4つのポイント—』 英語教育 11 大修館書店
https://www.arcle.jp/report/2020/pdf/ARCLE_SYMP02020_web.pdf